

尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書6

西ノ平遺跡  
コフケ遺跡

2005年3月

国土交通省中国地方整備局  
雲南市教育委員会

尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 6

西ノ平遺跡  
コフケ遺跡

2005年3月

国土交通省中国地方整備局  
雲南市教育委員会

## 序 文

尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査については、これまで旧木次町教育委員会が国土交通省の委託を受けて行ってまいりましたが平成16年11月1日の町村合併により、雲南市が発足したことから雲南市教育委員会が埋蔵文化財調査を引き継いでいます。

尾原ダム貯水池の中心地にあたる北原本郷地内の斐伊川左岸には河岸段丘が広がっていますが、ここには北原本郷遺跡、家の後Ⅰ・Ⅱ遺跡が所在し、島根県によって発掘調査が行われてきました。これらの遺跡からは縄文時代の配石遺構や土器埋設遺構などが確認され、さらに土偶なども出土したことから縄文時代後期における墓制や縄文人の精神世界の一端が窺われる遺跡となっています。

北原本郷遺跡を眼下に見おろす西ノ平遺跡でも縄文時代の落し穴と見られる遺構が見つかり、このころには川の周辺だけでなく集落から離れた山の上にも生活の場が広がっていた様子を窺うことができました。また、本遺跡では、三瓶山の噴火活動に伴う三瓶太平山降下火山灰（約3600年前）に続いて約4700年前の噴火物とされている三瓶角井降下火山灰も検出されました。これまで二時期の火山灰が同一遺跡から検出された例は斐伊川流域ではなく、今後の調査によつてはさらに降下火山灰に関する様々な情報が得られるものと期待しています。

おわりに、発掘調査にあたり、国土交通省斐伊川・神戸川総合開発工事事務所はもとより、島根県埋蔵文化財調査センター、関係者の皆様から格別のご指導、ご協力を賜りましたことに對し、厚くお礼申し上げます。

平成17年3月

雲南市教育委員会

教育長 土江博昭

# 例　　言

1. 本書は、国土交通省中国地方整備局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所の委託を受けて、雲南省教育委員会が平成16年度に実施した尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書である。

2. 本書で取り扱う遺跡は次のとおりである。

島根県雲南省木次町北原414番地外　　西ノ平遺跡

島根県雲南省木次町北原249番地外　　コフケ遺跡

3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体　平成16年4月1日～同年10月31日　木次町教育委員会教育長　永瀬豊美  
平成16年11月1日～　　雲南省教育委員会教育長　土江博昭

事務局　平成16年4月1日～同年10月31日

稻岡恵子（木次町教育委員会教育次長）　加木和子（同体育・文化振興係長）

平成16年11月1日～

高橋文男（雲南省教育委員会教育次長）　稻岡恵子（同生涯学習課長）

伊藤慶（　　同　　木次教育分室主任主事）

調査担当　坂本諭司（主幹・埋蔵文化財専門員）

調査補助　安川賢太（臨時職員）　宇田川千歌子（嘱託職員）　井原住世（整理事務臨時職員）

調査指導　島根県教育庁文化財課

島根県埋蔵文化財調査センター

井上見孝（前鳥取大学医学部助教授）

中村唯史（財團法人三瓶フィールドミュージアム財団指導課）

山田康弘（島根大学法文学部助教授）

発掘作業員　安部昭　石橋定利　内田稔　大島忠雄　亀山英夫　小林孝芳　斎藤治雄  
佐藤重治　周藤カヂ子　陶山勲　田部正次　難波正　野津盛　福田澄雄  
藤原盛一　吉廣富美雄　吉廣弘子

4. 発掘作業（発掘作業員雇用、重機借り上げ、発掘用具調達等）については、国土交通省中国地方整備局、社団法人中国建設弘済会、旧木次町の三者協定に基づき、社団法人中国建設弘済会へ委託した。

社団法人中国建設弘済会　〔現場担当〕小村敏行（技術員）　〔事務担当〕藤原愛子（事務員）

5. 本遺跡出土遺物の実測、トレース、観察表作成はいなか舎（田中義昭氏代表）に依頼した。

6. 掘図中の方位は、測量法に基づく第Ⅲ座標系の軸方位に準じ、レベル高は海拔高を示す。

7. 掘図の縮尺は、図中に明示した。

8. 調査区配置図は有限会社栄進が製作した測量図を元に、坂本が修正加筆した。

9. 本書は、執筆、写真撮影を坂本、遺物実測図を除く実測図作成を安川、編集を坂本、安川、宇田川が行った。

10. 本書掲載の出土遺物及び実測図、写真などの資料は、雲南省教育委員会で保管している。

## 本文目次

第1章	調査による経緯	5	第4章	コフケ遺跡	23
第2章	遺跡の位置と歴史的環境	6	第1節	調査の経過	23
第3章	西ノ平遺跡	8	第2節	調査の概要	24
第1節	調査の経過と概要	8	第3節	小結	26
第2節	I区の調査	10			
第3節	II区の調査	16			
第4節	小結	19			

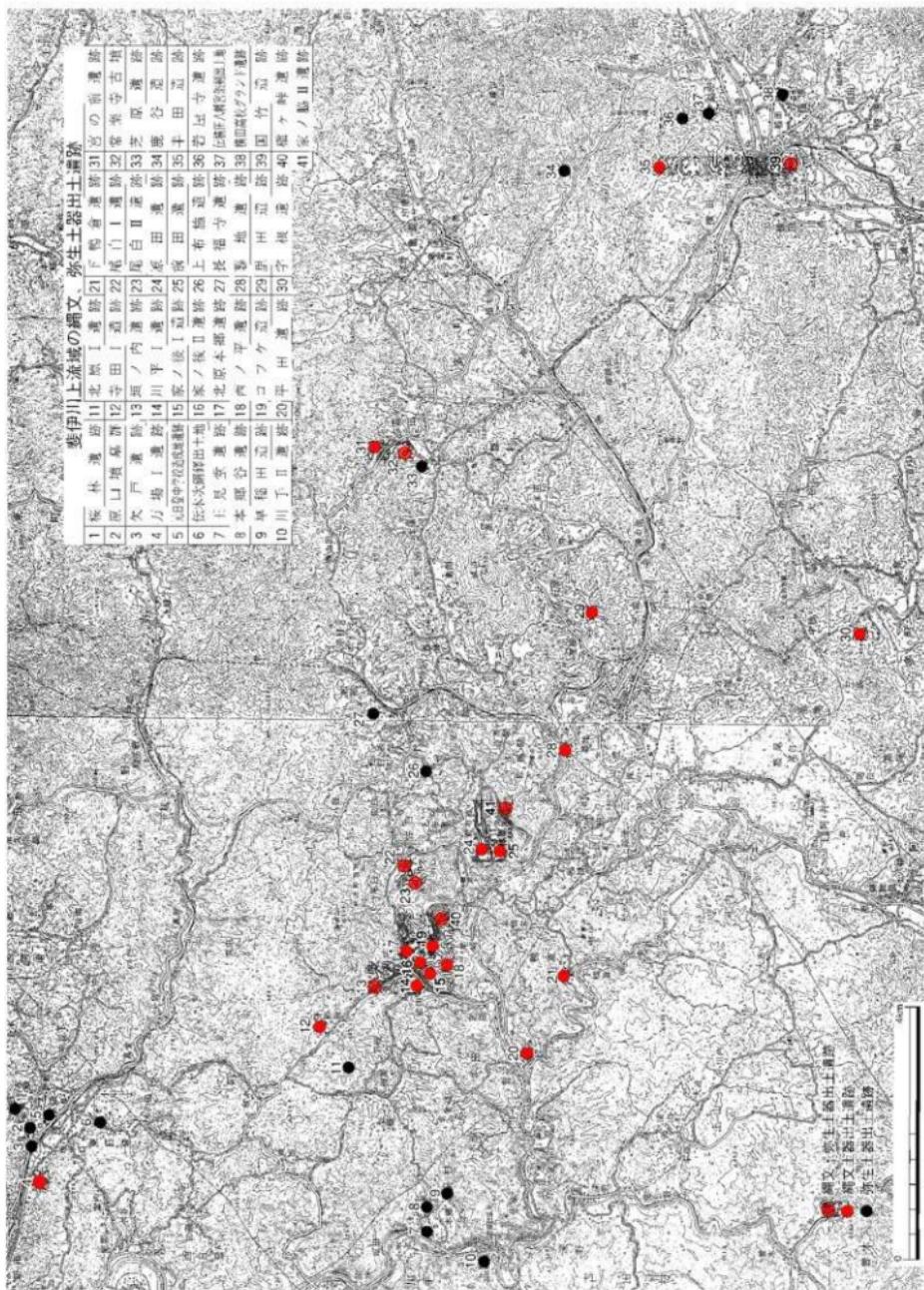
## 挿図目次

第1図	周辺遺跡図	4
第2図	西ノ平遺跡・コフケ遺跡調査範囲図	5
第3図	西ノ平遺跡調査後地形測量図・遺構配置図	9
第4図	I区遺構配置図	10
第5図	I区横断土層図	10
第6図	I区ピット実測図	11
第7図	I区炭窯跡検出状況実測図	12
第8図	I区炭窯跡平面図	13
第9図	I区近世墓群出土墓石・地蔵拝本	14
第10図	I区包含層出土土器実測図	15
第11図	II区縦断土層図	16
第12図	II区三瓶火山灰分布範囲図	17
第13図	II区包含層出土繩文土器実測図	18
第14図	II区包含層出土弥生土器実測図	19
第15図	三瓶火山噴火が確認された地点と斐伊川流域の縄文遺跡	20
第16図	コフケ遺跡土層堆積柱状図	23
第17図	コフケ遺跡トレンチ配置図	24
第18図	コフケ遺跡T3トレンチ土層図	24
第19図	コフケ遺跡精査部木杭列位置図	25
第20図	コフケ遺跡精査部遺物出土分布図	25
第21図	コフケ遺跡出土遺物実測図	26

## 表目次

第1表	三瓶火山噴火が確認された地点及び斐伊川流域の縄文遺跡一覧表	21
第2表	西ノ平遺跡近世墓遺構・遺物一覧表	21
第3表	西ノ平遺跡出土土器観察表	21
第4表	西ノ平遺跡II区包含層出土繩文土器観察表	22
第5表	西ノ平遺跡II区包含層出土弥生土器観察表	22
第6表	コフケ遺跡出土土器観察表	27

第1図 周辺遺跡図



## 第1章 調査に至る経緯

島根県東部における一大治水事業となる志津見ダム建設事業に続いて「平成のオロチ退治」とも称される尾原ダム建設事業が計画された。この建設事業に伴って埋蔵文化財発掘調査が平成9年より開始され、以後、島根県埋蔵文化財調査センター、雲南市教育委員会（平成16年10月31日まで本次町教育委員会）、仁多町教育委員会によって進められている。

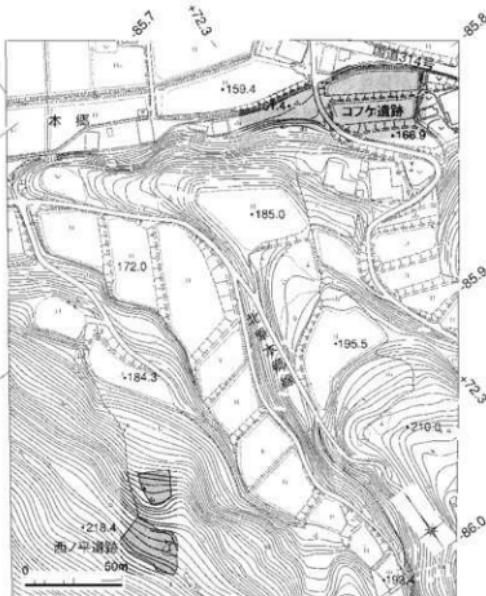
尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財包蔵地の確認は島根県埋蔵文化財調査センターによって行われている。本書に取上げる西ノ平遺跡の確認調査は、平成12年6月6日から同年6月14日にかけて行われた。調査概要によると、調査地は標高200mから230mの山の斜面となっており、上段にある平坦部分に設定された1トレンチから柱穴状遺構1基が検出され、下段の緩斜面に設定された3トレンチから縄文時代後期前半の鉢形土器などの破片16片、須恵器壺1片などが出土したとされる。この調査の結果、全面調査について上段部と下段部を合わせて400m<sup>2</sup>が調査対象面積とされた。

一方、コフケ遺跡は、西ノ平遺跡から東に230mの斐伊川に近い緩斜面に所在する。尾原ダム完成時の水没区域の中で最も広範な部分となる北原本郷の一角にあって、南側の谷から広がる小規模な扇状地となっている。前方には広い範囲にわたって縄文から中世にかけての遺構、遺物が確認される北原本郷遺跡が所在することから島根県教育委員会と事業者との間で協議が行われ、埋蔵文化財の有無の確認調査が行われることとなった。

調査は、平成15年12月3日から同年12月5日にかけて行われた。調査地の現況は泥潤な水田で合計6ヶ所にトレンチが設定された。

調査の結果、北西寄りに設けられたトレンチでは造成土の下層に堆積する黒褐色砂礫泥層から中近世の土師器と見られる上器片が出土し、上層の茶褐色土では木製容器片が出土したとされている。この黒褐色砂礫泥層は調査地全体に広がっていることから約3,200m<sup>2</sup>が確認調査の対象とされた。

以上の調査結果を踏まえ、平成16年3月24日付けで国土交通省中国地方整備局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所長より本次町長に対し、尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査委託について協議がなされた。これを受けて本次町では、平成16年4月1日付けで委託調査了承の回答を行い、当該遺跡の発掘調査及び確認調査を行うこととなつた。



第2図 西ノ平遺跡・コフケ遺跡調査範囲図 (1/2500)

## 第2章 遺跡の位置と歴史的環境

西ノ平遺跡及びコフケ遺跡は、雲南市本次町北原に所在する。二つの遺跡は共に北原本郷と呼ばれている斐伊川の河岸段丘とこの段丘を見下ろす山丘斜面に位置している。この地域は、斐伊川上流域の下流部に属している。各所で川が蛇行する沿岸一帯では河岸段丘が形成され、そこに営まれた多くの遺跡が所在している。

### 縄文時代

本書で取上げる遺跡の周辺地域で最も多いのが縄文遺跡である。多くの遺跡が後期から晩期にかけての遺跡であるが西ノ平遺跡の西方400mに所在する川平I遺跡では斐伊川上流域で最も古い縄文時代早期の黄鳥式や高山寺式などの押型文土器が出土している。押型文土器は斐伊川上流域では仁多郡横山町国竹遺跡や下大仙子遺跡で出土しているが雲南市本次町では本遺跡のみである。斐伊川の支流である仁多町阿井川の河岸段丘に所在する下鴨倉遺跡は前期から後、晩期を通じての土器が出土する遺跡として注目される。また、西の平遺跡から2.2kmほど下流に所在する平田遺跡では山陽側の様式をもつ甲木II式土器が、さらに、後期になると福山KII式土器が見られるようになる。横山町龍ノ駒遺跡などでも山陽瀬戸内の様式をもつ中津式土器が出土していることから、山陽ー中国山地ー斐伊川伝いへの縄文人の開拓ルートが想定される。平田遺跡の石器製作跡から出土した石錘の石材が香川県の金山産の可能性があることもこのことを裏付けているといえよう。

斐伊川上流域の縄文遺跡は中・後期から晩期にかけてのものがほとんどである。このうち平田遺跡、北原本郷遺跡、家の後II遺跡、仁多町地内の墓地遺跡、前田遺跡などでは土器埋設構が発見された。また、墓地遺跡から3体、北原本郷遺跡から1体の土偶も出土しており、縄文人の精神世界が偲ばれる遺物が多く出土する地域ともいえる。また、平田遺跡、北原本郷遺跡、川平I遺跡などでは石錘が多く出土する傾向が見られる。遺跡は全て川のそばに所在することから、石錘は漁労の網に用いられたと考えられ、縄文人の生活にとって川の存在は不可欠であったことを物語っているといえる。

### 弥生時代

縄文時代後・晩期に広まった縄文遺跡は、弥生時代になると遺跡の分布が希薄になってくる。特に前期の弥生遺跡は少なく、中期ごろになっても上流域奥部の横山盆地を中心に代山遺跡や国竹遺跡などが知られている程度である。出土遺物としては、横田八幡宮に伝えられた中細形C類の銅剣がある。中期後半になると斐伊川上流域の下流部にあたる本次町下布施地内の垣ノ内遺跡から弥生時代中期後半から後期末にかけての堅穴住居や掘立柱建物跡が複数発見され、当地域では有数の集落の一つと考えられている。また、広島県三次方面の土器文化を取り入れた塙町式土器が使われており、備後地域との交流が窺われる遺跡もある。

垣ノ内遺跡から北方に山を越えた東日登地内では伝本次銅鐸（外縁付鉢式II式）が出土している。また、平田遺跡でも同時期の土器が出土しているが、平田遺跡では、弥生時代終末から古墳時代初頭の大形建物跡から4基の鍛冶炉が検出され、その周囲から鉄錐の未製品や鉄片、

砥石、作業用の台石などが出土した。これにより、本遺跡に持ち込まれた板状の鉄素材が鍛冶炉で炙られ、鑿で不要部を裁断した後、砥石で研磨されるといった原始鍛冶の様相を伝える鍛冶工房として注目された。このほか、後期になると平田遺跡のやや下流にあたる早稲田遺跡や本郷谷遺跡、伝木次銅鐸出土地に近い久野川流域の桜林遺跡などがあつて集落が広がつていつた様子が見られる。なお、桜林遺跡の前方には久野川の河岸段丘が発達しており、弥生土器の散布地である欠戸遺跡が所在するほか、弥生時代の墳丘墓と考えられる原山墳墓群が所在する。また、このあたりは奈良時代、木次郷の郷庁が置かれた所とされており、木次郷の中心部と考えられている。

### 古墳時代

斐伊川上、中流域の古墳時代の遺跡は、圧倒的に古墳、横穴墓が多い。このうち前期古墳は、斐伊川に赤川や三刀屋川が合流する地点にまとまっている。景初二年銘の三角縁神獸鏡が出土した雲南市加茂町の神原神社古墳、同市木次町の斐伊中山古墳群、同市三刀屋町の松本古墳群1号墳、3号墳などである。この地域では中期古墳はほとんど見受けられないが、やや上流に入った仁多町地内の丸子山古墳群からは中期末の様相を呈した副葬品が出土している。そして、後期に入ると横穴式石室をもつ古墳が「出雲国風土記」に言う仁多郡家が置かれていた仁多町高田を中心とした山間の平地部をはじめとして、横田町の室原川、馬木川沿いに現れ、その数は斐伊川中流域に比べ圧倒的に多い。注目される古墳を挙げると、馬形埴輪や人物埴輪が出土した常楽寺古墳や長大な行室（全長7.0m）をもつ岩屋古墳、また、仁多町上鶴鳴地内に斐伊川上流域では數少ない前方後方墳、穴観2号墳（全長29m）が所在する。さらに近年、斐伊川に近い河岸段丘に所在する原田古墳から双龍環頭大刀、翡翠製勾玉、ガラス玉、馬具類等が出土し、仁多地域の歴史を解明するうえで注目される古墳となっている。

横穴墓は出雲平野部に遅れることなく出雲編年3期から出現するが、導入期の横穴墓は小池奥横穴墓群、小池横穴墓群など横田町地域に多い。このほか仁多町では殿ヶ迫廻横穴墓群3号穴、木次町では北原地内に所在する下布施横穴墓群1号横穴墓がある。いずれも後背墳丘をもち、墳丘上で葬送儀礼が行われたことが知られている。また、下布施横穴墓群1号横穴墓では金銅装大刀が出土している。この金銅装大刀は柄に葛を密に巻き、柄頭に黒漆を塗った上に金箔や銀箔を貼り、列点文が施されていた。金属製武具をあまり用いない製作技法から、いわゆる中央政権から地域の有力者に賜与されたものとは性格を異にする大刀とも考えられている。

ところで近年、尾原ダム建設に伴う発掘調査により、調査対象地域にある斐伊川沿いの遺跡から相次いで水祀りに関する遺跡が見つかっている。木次町の家の上遺跡や仁多町の円満寺遺跡がそれである。いずれも斐伊川にほど近い河岸段丘の奥部に位置しており、湧水の近くから土馬、手捏土器などが出土していて古墳時代後半から奈良時代にかけて水に関わる祭祀が行われたものと考えられている。なお、「出雲国風土記」三澤郷の条には大穴持命と阿遲須伎高日子命の神話に由来して出雲国造が神賀詞奏上の際、三澤にある水沼の水を用いて禊を行つたとされている。この水沼の所在は明らかではないが当地域もかつて三澤郷に含まれていた。

## 第3章 西ノ平遺跡

### 第1節 調査の経過と概要

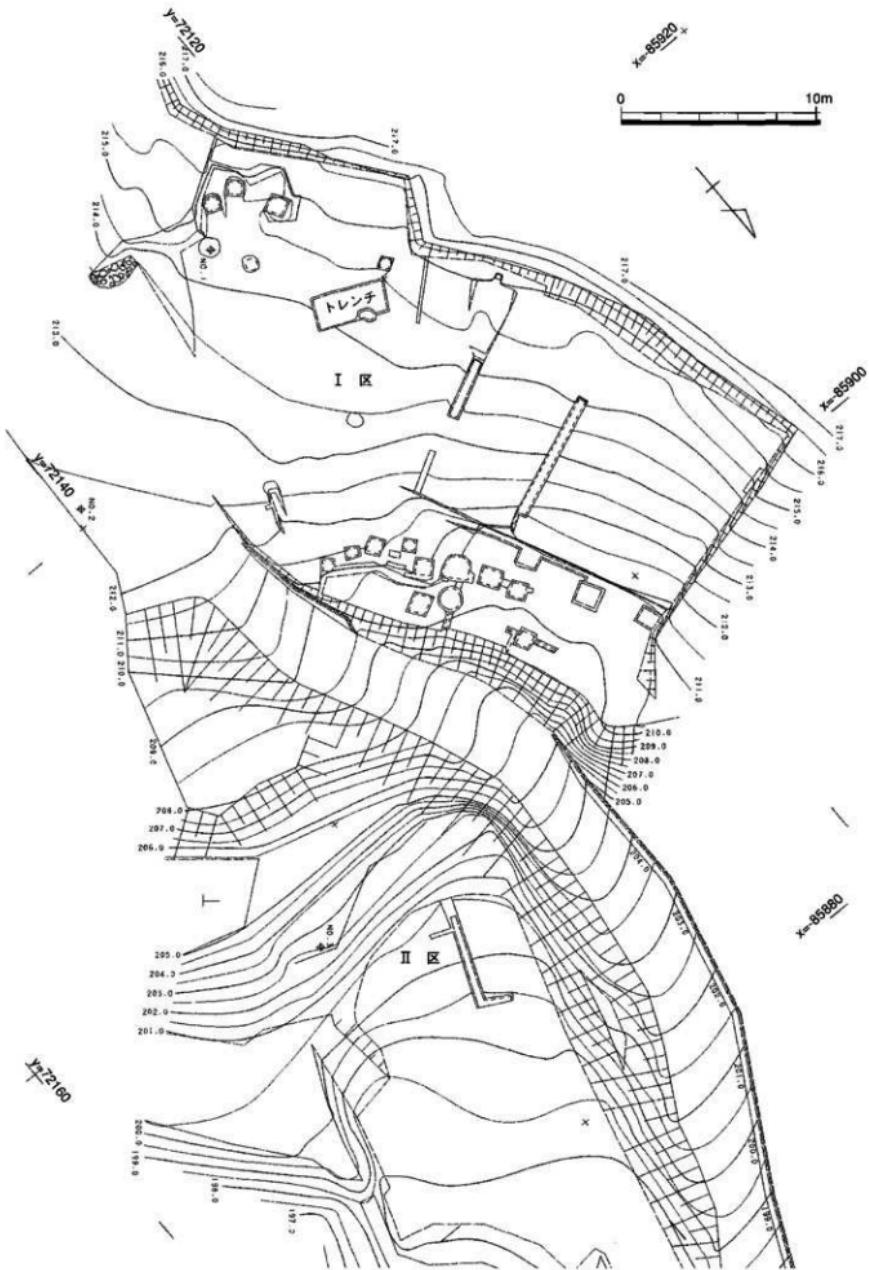
西ノ平遺跡は、雲南省本次町北原に所在し、斐伊川が大きく蛇行する北原本郷地内に形成された河岸段丘を北に望む標高200mから215mの山丘斜面に位置している。本遺跡から眼下に見下ろす河岸段丘には、北原本郷遺跡や家ノ後II遺跡が所在する。

西ノ平遺跡が所在する山丘の斜面には近年まで、水田や畑地が設けられ、東向きの斜面中腹には数か所に墓地が営まれていた。

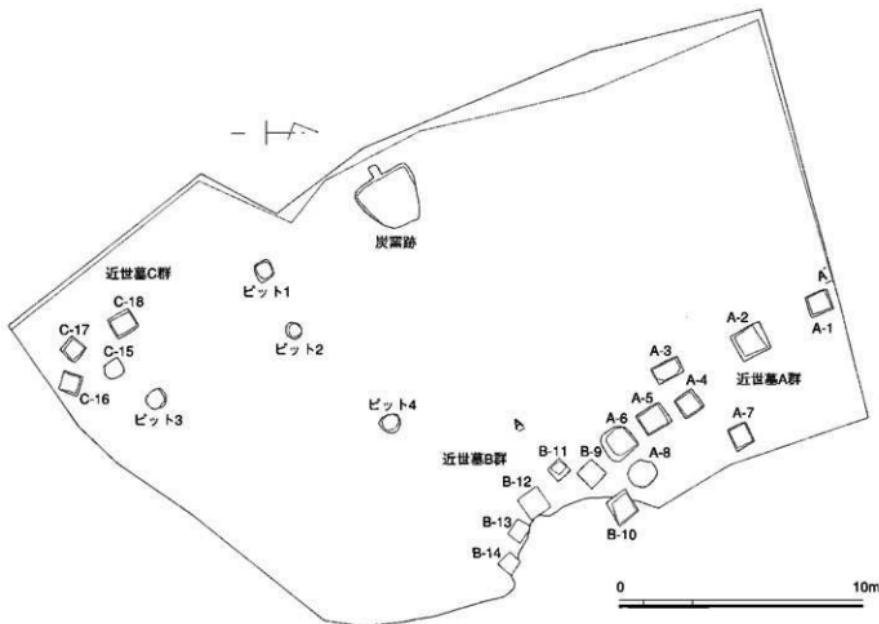
試掘調査は、島根県埋蔵文化財調査センターによって平成12年6月6日から同年6月14日にかけて行われた。調査は、山丘の平坦部分と畑地状の緩斜面の2か所にトレンチを設定、造構、遺物有無の確認が行われた。この結果、平坦部分から柱穴状遺構1基が検出され、緩斜面のトレンチから縄文時代後期前半の鉢型土器片、須恵器片などが出土した。このことから本遺跡の調査面積は平坦部分が290m<sup>2</sup>と緩斜面110m<sup>2</sup>の合計400m<sup>2</sup>が対象面積と判断された。

この試掘調査結果を受けて、雲南省教育委員会（当時木次町教育委員会）は平成16年4月に入ってまず現況の確認を行った。平坦部分で柱穴状遺構が確認されたトレンチの北側にはさらに平坦部が広がっていたため、調査区を拡張することとし、実質の調査面積は700m<sup>2</sup>となった。なお、平坦部全体をI区、下方にある緩斜面部をII区と呼称することとした。なお、発掘調査は平成16年4月19日から開始し、II区の完掘写真撮影を同年10月18日に行って調査を終了した。





第3図 西ノ平遺跡調査後地形測量図・遺構配置図(1/250)

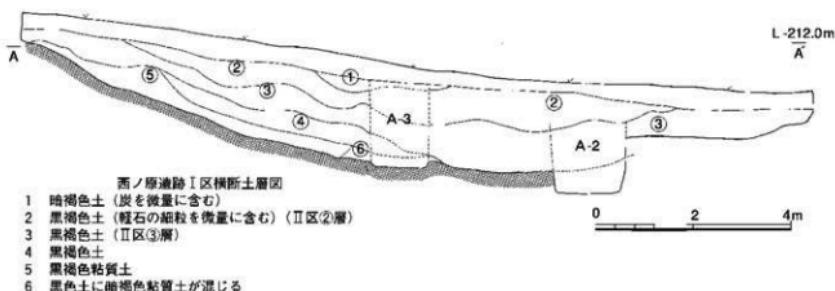


第4図 I区造構配置図 (1/200)

## 第2節 I区の調査

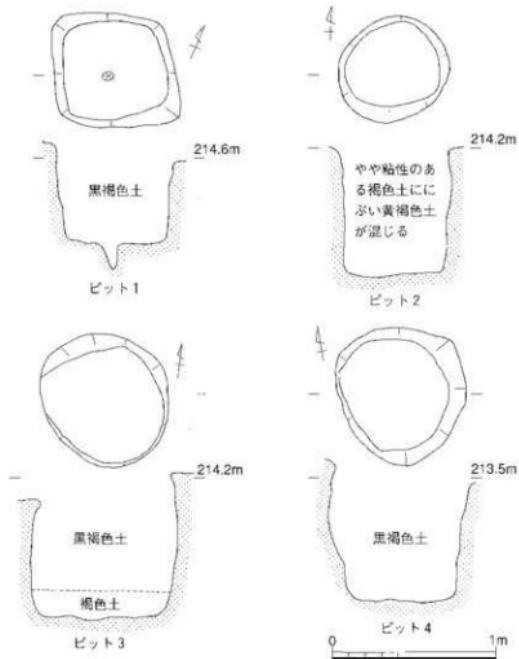
### 層序 (第5図)

I区は半堀部とは言いながら地山面はかなり起伏があり、調査区の北半は谷状に落ち込んでいた。層序としては①表土、②暗褐色土、③黒褐色土、④暗褐色土、⑤暗褐色粘質土、⑥地山土の順となっている。②層から④層にかけては自然堆積ではあるものの、③層には流れ込みとみられる縄文時代晚期の土器、炭窯の壁体屑を含んでいる。I区の南半は地山面が極めて浅い。



第5図 I区横断土層図 (1/100)

が北半は地山面がしだいに深く、谷状になって暗褐色土が堆積していた。本来この土層も全て除去すべきであったが、この地山面が谷状になっていて遺構が存在する可能性は低く、土質も周囲から流出して堆積したものと見られることなどから地山面まで掘り下げていない。I区の東前方に集中して営まれた近世墓A群は②層から掘り込まれている。



第6図 I区ピット実測図 (1/30)

### 遺構

I区では調査区南半部で近世墓群1、ピット4、中央西端から炭窯跡1、北半東寄りからも近世墓群を確認した。これらの近世墓群については概略を一覧表(表1)で示すこととする。

#### ピット（第6図）

ピット1は南半部の山際から検出した。平面形は概略方形で58×53cm、検出面からの深さは53~60cmを測る。底面も概略方形で中央には径15cm、深さ18cmの円形の掘り込みが見られる。覆土は全て黒褐色土で遺物は何ら検出されなかった。

#### ピット2

ピット2はピット1の東前方2.5mの位置にあり、試掘調査の際に柱穴状遺構とされたもの

である。ピットの3／4はトレンチの掘削によって消滅している。平面形は概ね楕円形と推計されるが法量は不明である。掘り方はほぼ垂直に掘下げられており、検出面からの深さは1.1mを測る。覆土はやや粘性のある褐灰色土にぶい黄褐色土が混じる。

### ピット3

ピット3は調査区南端から検出した。平面形は不整円形で長径70cm、短径62cmを測る。底面はほぼ円形で平坦になっているが坑内はわずかに広がって袋状となる。覆土は底面に18cmほど褐色土が堆積するが上層は黒褐色土が堆積する。遺物は検出されなかった。

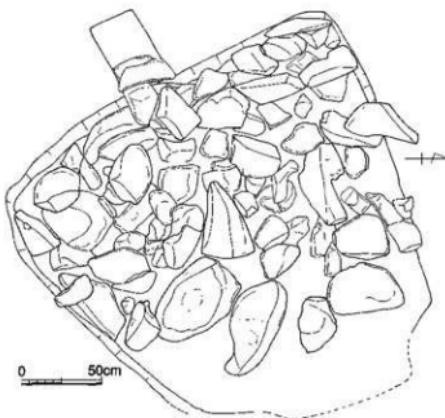
### ピット4

ピット4はI区中央からやや南よりで検出した。平面形は不整円形で径58cm、底面径は50×45cmでわずかに楕円形を呈する。坑内的一部分が袋状に広がる。覆土は黒褐色土で遺物は見られなかった。以上記した4基のうちピット1については底面に掘り込みがあり、落とし穴に通有な構造となっている。覆土からの遺物はなかったものの北半から縄文土器が出土していることなどを勘案するとこれらのピットは縄文時代晩期ころの落とし穴の可能性が考えられる。

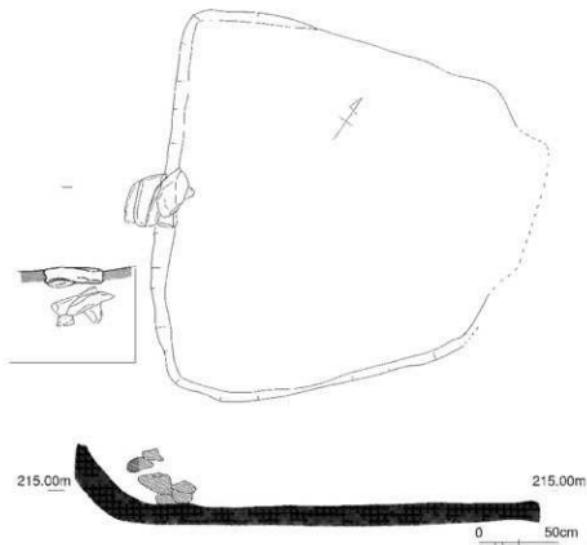
### 炭窯跡（第7図・8図）

炭窯跡はI区中央西端の山際から検出した。検出時の状況は炭窯の甲が完全に除去され、床面の奥側に手のひらから人頭人の山石が山積していた。また、焚口も削平され床面は消滅していた。かつてこの平坦地で畑作が行われていたことから造成の際に炭窯は破壊され、造成地に散乱していた山石がここに寄せ集められた可能性が高い。

炭窯跡の形状と規模であるが、平面形は奥壁の両端が角をもつもので検出時のプランは不整方形を呈している。規模は奥壁の幅が上場で2.25m、最大幅2.42mを測る。床面に近い奥壁はわずかに残存しており、煤が付着していた。奥行は残存長2.35mを測るが消滅した焚口を考慮すると奥行は2.8から3.0mになると推定される。煙道は主煙道のみで幅30cmを測る。地山を約50°の傾斜で方形に抉り、山石で埋まれていた。床面は熱を受けて赤褐色となっていたが被熱部の厚さは2mmと薄く炭焼きの操業回数は少なかったと考えられる。炭窯の構造からは明治時代以前か明治時代初頭に使用された可能性が窺われる。



第7図 I区炭窯跡検出状況実測図 (1/30)



第8図 I区炭窯跡平面図 (1/30)

#### 近世墓 (第4図・9図)

I区周辺の平坦部では近年まで数か所の墓地が営まれており、尾原ダムの建設に伴って墓地の移転が行われた。本遺跡の発掘調査で確認された墓地と移転された墓地の造営者とのつながりがあるかどうかは不明であるがI区では3群の墓地を確認した。これをA、B、C群として出土した墓石の概略を記す。

A群はI区の北寄り東端から8基を検出した。大半が座棺を埋めたあとに山石や川石が円形に積まれておらず、A-7号墓のように墓石の上半が露出しているものも確認された。また、I区の近世墓群では戒名等が刻まれた墓石4基と地蔵1体を確認している。A群では第9図4が出土した。銘文は□□十二□□□真□岩□喜禪定門□と見られる。

B群はA群の横に連なる様相で検出した。このため墓群との境が判然とせず9号と10号墓についてはA群に入る可能性も残される。この9号と10号墓以外はほとんど土壇の底面のみ残存していた。また、B群の前方は墓地の移転によって削り取られていた。この墓群から出土したと推定される地蔵が付近から見つかっているが、これには文化四卯 正月廿九日の銘文が見られる。

C群では調査区の南端から近世墓を4基を検出し、墓石3基を確認した。いずれも川原石や花崗岩を簡単に整形して銘文が刻まれている。銘文は第9図1が道□禪定門 廿七日。同図3が明和三戌 幻□童子 十一月八日。同図5は明和二□ 白□妙雪信女 □□□□□と確認でき、江戸時代後半の範疇に納まると考えられる。確認した近世墓の規模や遺物は章末に別表として記した。



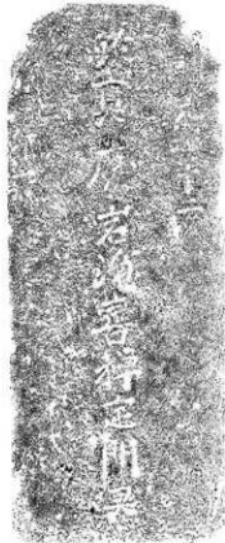
1



2



3



4



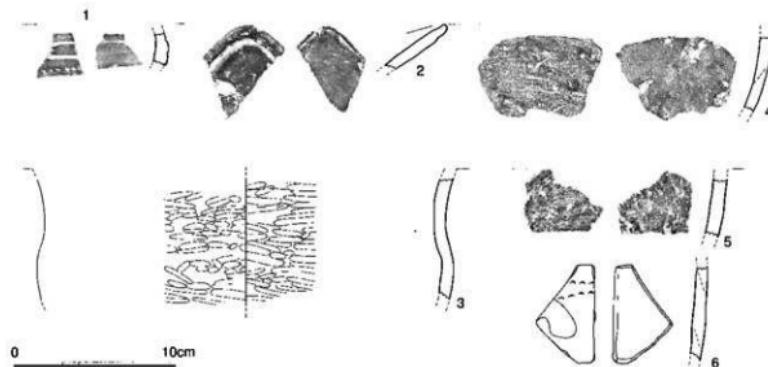
5

第9図 I区近世墓群出土墓石・地蔵抜本 (1/5)

## 遺物（第10図）

I区から出土した土器はいずれも自然堆積した黒褐色土にまぎれ込んだもので遺物の数も少なくほとんどが縄文土器であった。

第10図1は、有文の精製浅鉢である。小片のため確証はないが頸部から肩部と見られる。外面には2条の凹線が平行に入り、その下部に左方向からの連続列点文が施される。内面はミガキとなっている。時期は、晩期前葉かと思われる。2は、方形の精製浅鉢の口縁部である。上面には口縁端部直下に凹線が1条巡る。胎土に1~2mmの砂粒、金雲母を含む。時期は晩期中葉～後葉と見られる。3は、精製深鉢の肩部である。内外面とも棒状工具によってミガキが施され、半磨研状となる。胎土に微細な石英や砂粒、金雲母を含む。外面に煤が付着する。4は粗製深鉢の胴部であろう。外面に削痕が付いており、調整はケズリと見られる。外面に煤が付着する。内面は手ナデが施される。胎土は2mm前後の砂粒、金雲母を含む。5は、近世墓の配石の間から出土したもので粗製深鉢の破片である。外面の色調は2、3が灰黄褐色に対し、4は橙色を呈する。胎土に1~2mmの長石、金雲母を含む。これらの時期はほぼ晩期の範疇に入るるものである。6は、I区で確認された唯一の弥生土器で壺の胴部片である。外面にクサビ状の刺突が連続して施される。胎土は緻密で2mm程度の砂粒、金雲母をわずかに含む。破面の色調は明黄褐色を呈する。



第10図 I区包含層出土土器実測図 (1/3)

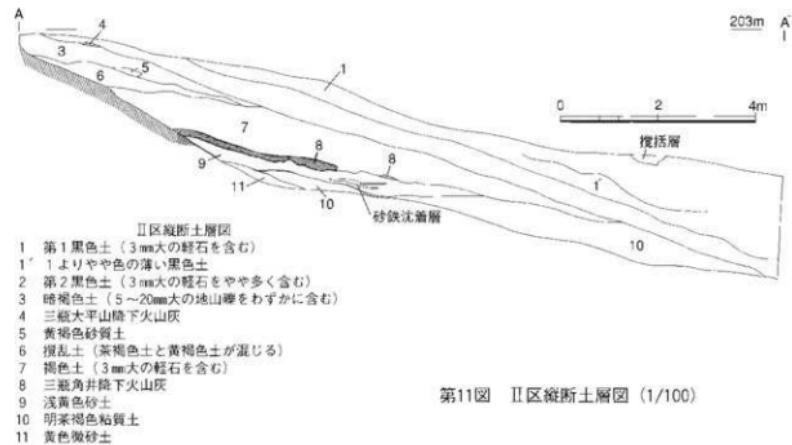
### 第3節 II区の調査

#### 層序 (第11図)

II区はI区から山道を隔てたI区より低い緩斜面に位置する。I区との比高差は約11mとなっている。

この緩斜面の幅は16m、奥行15mとそれほど広くはない。I区と同様、II区の東側にも墓地が営まれていた。I区を含む上方からの流れ込みのためか土砂はI区より厚く堆積している。

本調査区では付近に所在する家ノ後1遺跡や北原本郷遺跡と同様、三瓶大平山降下火山灰を検出したが周辺からまだ確認されていない三瓶角井降下火山灰が検出されたことは注目される。三瓶角井降下火山灰は地山より30cm上面から、また、三瓶大平山降下火山灰は三瓶角井降下火山灰の1.0m上層から検出した。地山上には明茶褐色の粘質土が堆積し、土層の間には砂層があり込んでいた。また、粘質土には砂鉄層が少なくとも3層確認できた。この粘質土上に三瓶角井降下火山灰が厚さ6~17cm、長さ4.55mにわたって確認された。地形が傾斜地となっていることから火山灰層の前方は上砂の流出によって消滅したと考えられる。三瓶角井降下火山灰層の上層は3mm前後の軽石をやや多く含む褐色土となっており、この上面に三瓶大平山降下火山灰が厚さ5~7cm、長さ1.15mほど堆積していた。本来は幾分広く分布していたと思われるが七砂の流出によって大部分が流失したと考えられる。さらにこの場所が斜面の奥まった所であったため、流出を免れて偶然残ったものと推察される。この三瓶大平山降下火山灰上層には最大2.5cm前後の軽石が少量混じる黑色土が、さらに上層は軽石を含まない黑色土が堆積する。いずれも二次堆積土である。



## 遺構（第12図）

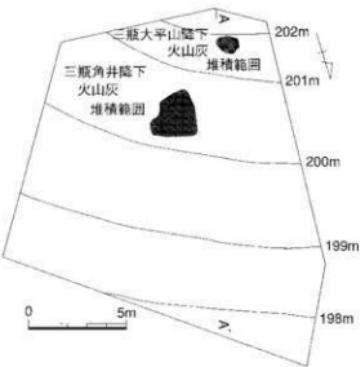
II区から検出したものは前述した火山灰の分布面のみである。いずれも斜面の奥まった場所で斜面に沿って傾斜して分布していた。分布面の広さは、三瓶大平山降下火山灰が、幅1.2m、奥行90cmを測る。三瓶角井降下火山灰はやや広く、最大幅2.6m、奥行3.0mにわたる。いずれも表面は凹凸状となり、堆積の厚さも一定ではなかった。

## 遺物

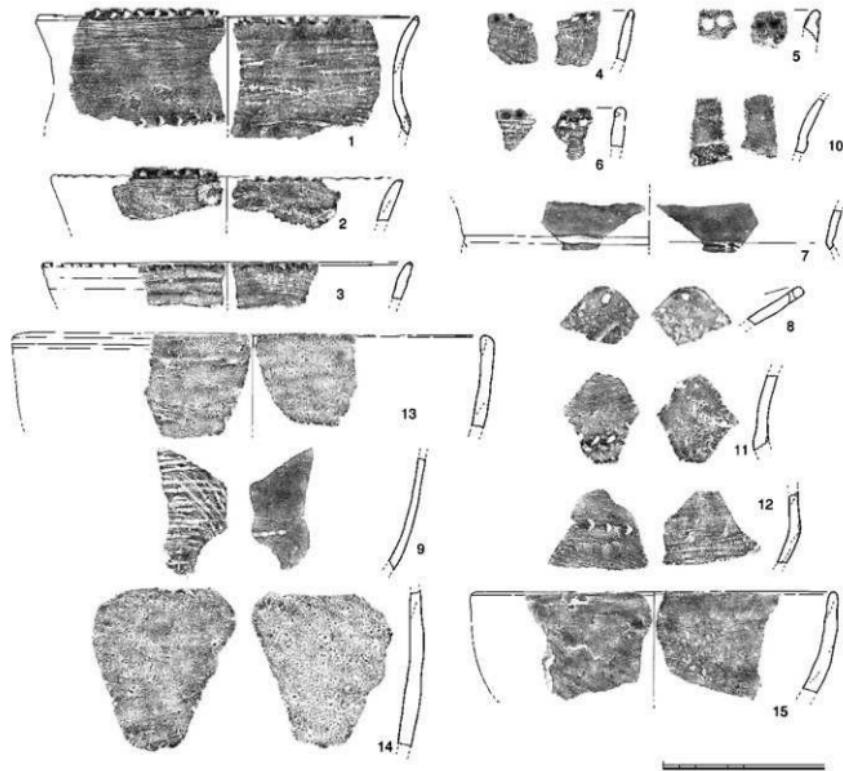
### 縄文土器（第13図）

I区では、10点足らずの縄文土器を採取したがII区ではこれよりもさらに多い土器が出土した。しかし、小片が多いため、縄文土器についてはこのうちの主なものを取上げる。

1、2、3は、口縁端部にキザミをもつ粗製無文深鉢である。1は、口径24cmを測る。谷尻式と見られる。口縁端部に右方向からのキザミ目が押し引き状に施される。また、肩部には半竹管状の連続刺突文が見られる。2、3は口縁端部にわずかにキザミ目が入る程度である。3は、外面に煤が付着する。4～6は内外面に孔が穿たれた深鉢形の土器である。いずれも粗製無文の深鉢で、4は、口縁部内面に浅い孔を連続して刺突するもので口唇の器厚は薄い。5は、口縁部の外側直下に竹管状の工具がまっすぐに刺突されている。口縁端部は丸くおさめる。6は、口縁端部の直下内面に角形の工具で押引きして刺突が施される。口縁端部は平坦に調整されている。これらはいずれも孔列土器の類に入るもので晩期中葉と考えられる。7～9は精製浅鉢である。7は、頸部の破片で頸下部直下に凹線が一条巡る。調整は内、外面ともミガキで外面の色調は灰黄褐色を呈し、焼成は良好である。8は、I区出土の方形浅鉢と同類の浅鉢のコーナー部である。口縁端部は大きく開き、口縁部は波状となる。コーナー端部に穿孔が施される。9は、いわゆる黒色磨研土器である。外面は主として横方向に二枚貝条痕を施した後、斜め方向にも条痕が施される。内面は丁寧なミガキとなる。胎土は緻密で色調も橙色を呈しており、搬入された可能性も考えられる。11、12は胴部から頸部に刺突が施される有文の粗製深鉢である。11は谷尻式と考えられる。頸部の屈曲部にクサビ状の連続刺突文が巡る。調整は外面がミガキ、内面はナデとなっている。12は、口縁部が外反し、頸部は逆「く」字状に屈曲するタイプの深鉢である。胴部に半竹管状の連続刺突文が施される。外面に煤が付着する。時期は晩期中葉と考えられる。13、14は粗製無文深鉢である。13は口径30cmを測る。三瓶太平山降下火山灰層直下の二次堆積土層から出土した。口縁外面を丸くおさめる。15は、浅鉢である。口縁端部を丸くおさめる。内外面の調整はやや粗いナデとなる。外面の肩部まで煤が付着する。



第12図 II区三瓶火山灰分布範囲図 (1/250)



第13図 II区包含層出土縄文土器実測図 (1/3)

#### 弥生土器（第14図）

西ノ平遺跡から出土した土器で弥生土器と確認できるものは非常に少なく、このうち時期が考えられるもののみを図化した。1と2は壺の口縁部である。「く」の字形に屈曲する頸部をもち、口縁端部は上方にやや拡張される。体部は肩部から「八」字状に開く。1は拡張部外面に凹線が2条わずかに認められるが、2は凹線がなく平坦になる。調整は、風化による磨滅のため判然としないが内外面ともナデと思われる。時期は中期後葉と考えられる。3は、壺の胴下部の破片と思われる。器厚は下部側で1.8cmを測る。調整は外面がヘラミガキ後ナデ、内面はナデとなる。4は、壺の底部であろうか。厚手の平底で製作時に開口した底部中央に外から粘土を差し込んで底部とした部分の可能性もある。色調や胎土の様相から3と同一固体の可能性も考えられる。

#### 第4節 小 結

西ノ平遺跡は、標高200~215mを測る支尾根の比較的狭い中腹緩斜面に位置する遺跡で縄文時代の落し穴と考えられる構造を確認することができた。

共伴の遺物は認められなかったが同区から出土した土器から勘案すると時期は晩期ころと推定される。本遺跡の南6.0kmには楨ヶ峠遺跡が所在する。縄文時代後期から晩期にかけての土器が出土し、落とし穴と見られる土坑群が検出されている。

楨ヶ峠遺跡も斐伊川にほど近い丘陵斜面に位置しており、地形的にも本遺跡と似かよっている。この時期、斐伊川縦片に営まれた集落の人々は後背に連なる山丘を狩猟の場にしていたことも想定してよいかもしれない。なお、試掘調査の際に出土した縄文時代後期及び古代の土器は今回の調査では確認することはできなかった。

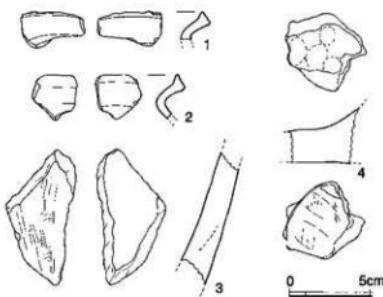
西ノ平遺跡では、すでに周辺の遺跡から検出されていた三瓶太平山降下火山灰とともにその下層から三瓶角井降下火山灰も併せて確認された。三瓶角井降下火山灰と推定される火山灰は鳥取県日南町で確認されているが、斐伊川流域で確認されたのは初例と考えられる。残念ながら遺構に伴う縄文土器ではなく、わずかに三瓶太平山降下火山灰層の直下層から粗製土器が1点出土したのみであり、土器と三瓶山火山灰との層位的な関連付けはできなかった。当地域に所在する縄文遺跡の多くが斐伊川沿いに位置している。三瓶角井降下火山灰の確認は困難ではあるが、斐伊川上流部においても洪水などの影響の少ない山の中腹部などに三瓶角井降下火山灰層が存在することが明らかとなったといえる。

#### 斐伊川上流域における三瓶火山噴火物について

発掘調査に伴って三瓶火山の噴出物が考古学的に調査されたのは近年のこと、1994年から1996年にかけて島根県が行った飯石郡頃原町に所在する板屋Ⅲ遺跡の発掘調査が初例とされている。ここでは、第1ハイカと呼ばれる三瓶太平山降下火山灰から三瓶浮布降下火山灰層までが確認され、縄文時代の遺物包含層が4つに分けられることが明らかとなる大きな成果が得られている。

一方、三瓶山から東方に34km離れた斐伊川上流域では河岸段丘に所在する雲南省木次町家の後1遺跡や仁多町原田遺跡などから三瓶太平山降下火山灰が検出されている。これらの多くは堆積厚1cm前後からレンズ状に散在する場合が多いとされている。西ノ平遺跡の場合もどちらかといえばレンズ状で面的な広がりは認められなかった。このような堆積状況は地形状況が与える影響のほか、噴出当時の天候や風向き等に左右されたことも推定される。

さらに本遺跡では、三瓶太平山降下火山灰以前の噴火物である三瓶角井降下火山灰も確認さ



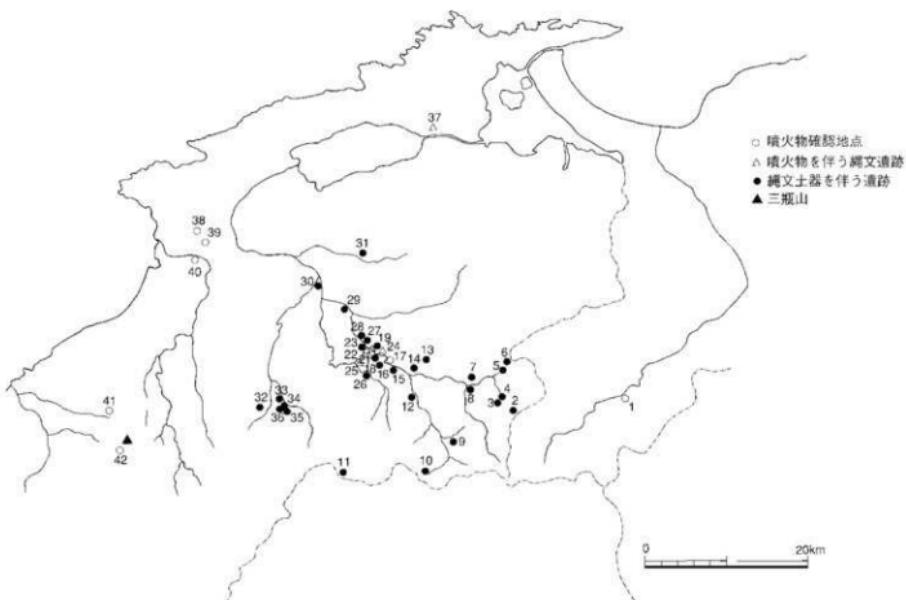
第14図 II区包含層出土弥生土器実測図（1/3）

れた。この噴火物は三瓶山から東に約62km離れた鳥取県日南町霞牛ノ尾遺跡で確認され、堆積厚は30cm以下とされている。今のところ、斐伊川上流域では本遺跡以外に三瓶角井降下火山灰層は確認されていない。本遺跡の場合、堆積厚は最大17cmであったが、この火山灰が東南東方向に主軸をもつて分布する可能性があることを裏づけているかもしれない。また、三瓶火山の噴火に由来する軽石は、本遺跡では最大2.5cm前後の大きさに過ぎなかったが本遺跡から2.2km斐伊川下流に位置する平田遺跡では最大 $5.4 \times 4.7 \times 2.0$ cmの軽石が検出されている。三瓶太平山降下火山灰に伴う噴火物の可能性があり、三瓶火山から飛来したものとすれば噴火の凄まじさは想像に難くない。

前述したとおり、火山灰層と縄文土器の層位関係は遺物量や斜面という地形の影響などからほとんど成果は見られなかった。今後当地域においても、三瓶太平山降下火山灰層のみならず三瓶角井降下火山灰層も検出される可能性があり、遺構、遺物と火山灰層との関係がより明らかになることを期待したい。



平田遺跡第II調査区出土軽石



第15図 三瓶火山噴火物が確認された地点と斐伊川流域の縄文遺跡 (1/60000)

第1表 三瓶火山噴火物が確認された地点及び斐伊川流域の縄文遺跡一覧表

番号	遺跡名	備考	番号	遺跡名	備考
1	露牛ノ尾遺跡	三瓶角井降下火山灰	22	家ノ後工I遺跡	三瓶噴火物、配石墓
2	龍ノ駒遺跡	中津式	23	川平工I遺跡	早期～晚期、高山式
3	稗ヶ谷遺跡	—	24	家ノ駒II遺跡	三瓶噴火物
4	大仙子遺跡	押型文土器	25	平田遺跡	福田KII式、中期～晚期
5	竹崎井西遺跡	磨削繩文土器	26	下鳴倉遺跡	早期～晚期、羽島下層3式
6	小方丈遺跡	—	27	垣ノ内遺跡	船元式、中津2式
7	半田遺跡	—	28	寺田工I遺跡	後期
8	国竹遺跡	押型文土器、落し穴	29	万場工I遺跡	後期後半～晚期
9	曲谷遺跡	—	30	熊谷遺跡	後期
10	大鉢穴遺跡	—	31	角田遺跡	—
11	王貫遺跡	磨削繩文土器	32	柏原遺跡	—
12	宇根遺跡	绳文後期	33	栗谷遺跡	—
13	宮ノ前遺跡	—	34	宮田遺跡	—
14	中田遺跡	—	35	古殿遺跡	—
15	暮地遺跡	後期後半、上鶴、倒立埋甕	36	森谷川遺跡	—
16	前田遺跡	後～晚期、埋設土器	37	鳥越大学構内遺跡	三瓶角井降下火山灰
17	原田遺跡	三瓶噴火物、埋設土器	38	小山遺跡	三瓶噴火物
18	燒ヶ峰遺跡	後～晚期、石棒、土製耳杯	39	藤ヶ森南遺跡	三瓶噴火物
19	尾白工I・II遺跡	後～晚期	40	旧波根酒	三瓶噴火物
20	北原本野遺跡	三瓶噴火物、埋設土器・土偶	41	飛小豆原埋没林	三瓶噴火物
21	西ノ平遺跡	晚期、三瓶角井降下火山灰	42	三瓶町緑が丘	三瓶噴火物

第2表 西ノ平遺跡近世墓構造・遺物一覧表

基群	号数	遺構					遺物		その他の
		平面形	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	「入骨」	錢貨	—	
A	1	角	1.00	—	0.90	—	1.50	—	釘
	2	角	1.30	—	1.20	—	1.70	○	6枚 釘
	3	角	1.20	—	0.70	—	1.40	—	釘、兩端片
	4	角	0.95	—	0.95	—	1.60	○	釘、鐵製品、煙管、飾り玉、硯、櫛、銅製品
	5	角	1.10	—	1.00	—	1.50	—	かなり上層部より出土
	6	角	1.20	—	1.20	—	1.30	—	釘、鐵製品(銅製の物が付着)
	7	角	1.00	—	0.80	—	1.50	○	釘、鐵製品、漆器
B	8	円	1.10	—	1.10	—	—	○	釘、煙管
	9	角	0.90	—	0.85	—	—	○ ○	煙管、漆器
	10	角	1.10	—	1.00	—	1.50	○	釘、鐵製品?
	11	角	0.70	—	0.70	—	1.50	—	陶器
	12	角	1.05	—	0.95	—	1.40	○	釘、煙管
	13	角	0.80	—	0.65	—	1.40	○	釘、盃、壺、陶器片
	14	角	0.70	—	—	—	1.40	○	釘、煙管
C	15	円	—	—	—	—	—	○	7枚 煙管(2)
	16	角	—	—	—	—	—	○	6枚 煙管
	17	角	0.85	—	0.85	—	1.40	—	煙管、鐵鑄
	18	角	0.80	—	0.80	—	1.40	—	釘
	19	角	1.00	—	0.95	—	1.30	○	釘

第3表 西ノ平遺跡出土土器観察表

括弧	遺物	写真	地区	出土位置	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	内面の調整	外側の調整	形態・文様の特徴	備考
番号	番号	圆版	I区	包含層	縄文	精製浅鉢	—	—	—	外:褐色 内:にい黄 褐色	ミガキ ミガキ 2条の凹線、列 点文	ミガキ	有文土器	
10	1	—	I区	包含層	縄文	精製浅鉢	—	—	—	外:褐色 内:にい黄 褐色	ミガキ ミガキ 口縁端 底面下に1条凹 線	ミガキ ミガキ 口縁端 底面下に1条凹 線	口縫大きめ引き或状 方形縦模浅鉢	
△	2	—	I区	包含層	縄文	精製浅鉢	—	—	—	外:灰白色 内:黄褐色	ミガキ ミガキ 指ナギ 1条凹線	ミガキ ミガキ 指ナギ 1条凹線	口縫~頸部ゆるく外反、 体部ゆるく進く「く」字 状に屈曲 外面に擦付着	
△	3	—	I区	包含層	縄文	精製浅鉢	—	—	—	外:灰褐色 内:にい黄 褐色	ミガキ ミガキ 指ナギ 1条凹線	ミガキ ミガキ 指ナギ 1条凹線	口縫大きめ引き或状 方形縦模浅鉢	
△	4	—	I区	包含層	縄文	粗製深鉢	—	—	—	外:灰褐色 内:にい黄 褐色	ミガキ ケズリ 手ナグ (ヨコ)	ミガキ ケズリ 手ナグ (ヨコ)	粗製土器 粗製手平部片 粗製上器	
△	5	—	I区	包含層	縄文	粗製深鉢	—	—	—	外:褐色 内:灰褐色	ナデ? ナデ?	ナデ? ナデ?	粗製土器	
△	6	—	I区	包含層	彌生	窓	—	—	—	外:灰褐色 内:明黄褐色	ナデ、風 ナデ	ナデ、風 ナデ	体部や外側 2段くび状突起文	

第4表 西ノ平遺跡II区包含層出土縄文土器観察表

括弧番号	遺物写真番号	図版	地区	出土位置	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	内面の調整		外面の調整		形態・文様の特徴	備考	
											ケズリ、指圧痕	口縁端部；削日、直下；溝、斜側突起、ナデ	口縁端部；削日(連続)、余波後ナデ	粗製無文土器			
13	1	II区 包含層	縄文	粗製 深鉢	24	-	-	外：灰黄色 内：灰黃褐色	ケズリ、指圧痕	口縁端部；削日、直下；溝、斜側突起、ナデ	口縁端部；削日(連続)、余波後ナデ	口縁端部；刀身に外反。 颈部：追「く」字状に加曲	谷尻式 焼付着				
	2	II区 包含層	縄文	粗製 深鉢	22	-	-	外：灰黃褐色 内：灰黃褐色		ナデ。指圧痕	口縁端部；削日(連続)、余波後ナデ	粗製無文土器			谷尻式		
	3	II区 包含層	縄文	粗製 深鉢	23	-	-	外：灰黄色 内：灰黃褐色		ハケ状；ヨコナデ	口縁端部；削日(連続)、ナデ	体部は外傾し、丸くおさめる口縁端部へと統合	外面に焼付着				
	4	II区 包含層	縄文	粗製 深鉢	-	-	-	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色		口縁端部；削日直下；溝、斜側突起、ナデ	口縁端部；削日直下；溝、斜側突起、ナデ	口縁外傾気味 粗製無文土器					
	5	II区 包含層	縄文	粗製 深鉢	-	-	-	外：灰黄色 内：にぶい黄褐色				孔列文？	丸くおさめる口縁端部	谷尻式			
	6	II区 包含層	縄文	粗製 深鉢	-	-	-	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色		刺突文(押阿記)、ナデ	口縁端部(ヨコ)	口縁端部(ヨコ)			谷尻式		
	7	II区 包含層	縄文	精製 深鉢	-	-	-	外：灰黃褐色 内：にぶい黄褐色		ミガキ	頂下端直下；一筋凹窓、ミガキ	頂下端直下；一筋凹窓、ミガキ	頂部連「く」字に屈曲 体部大き外傾				
	8	II区 包含層	縄文	精製 深鉢	-	-	-	外：灰黄色 内：にぶい黄褐色		ナデ	ナデ、穿孔	方型穿孔、口縁部大きく開き浅底、粗製上器					
	9	II区 包含層	縄文	精製 深鉢	-	-	-	外：褐色 内：灰黃褐色		ミガキ	ミガキ	黑色研磨					
	10	II区 包含層	縄文	粗製 深鉢	-	-	-	外：にぶい黄褐色 内：灰黃褐色		ていねいなナデ	ナデ	頭部小さく屈曲、口縁外反					
	11	II区 包含層	縄文	粗製 深鉢	-	-	-	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色		ナデ、指圧痕	口縁下部；削れ 刺突文 ミガキ	くちび状突起 口縁部外反			谷尻式		
	12	II区 包含層	縄文	粗製 深鉢	-	-	-	外：灰黄色 内：灰黃褐色		上部ナーハ手竹管状状剥離 指圧痕 直下部 底部	上部ナーハ手竹管状状剥離 指圧痕 直下部 底部	頭部連「く」字に屈曲 口縁部外反					
	13	II区 包含層	縄文	粗製 深鉢	30			外：にぶい黄褐色 内：灰黃褐色		ナデ	ナデ	体部は外傾し、丸くおさめる口縁端部へと統合	焼付着	粗製無文土器			
	14	II区 包含層	縄文	粗製 深鉢	-	-	-	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色		ナデ	ナデ		粗製無文土器				
	15	II区 包含層	縄文	粗製 深鉢	-	-	-	外：にぶい黄褐色 内：にぶい黄褐色		ナデ。指圧痕	ナデ、指圧痕	体部は外傾し、丸くおさめる口縁端部へと統合	焼付着				

第5表 西ノ平遺跡II区包含層出土弥生土器観察表

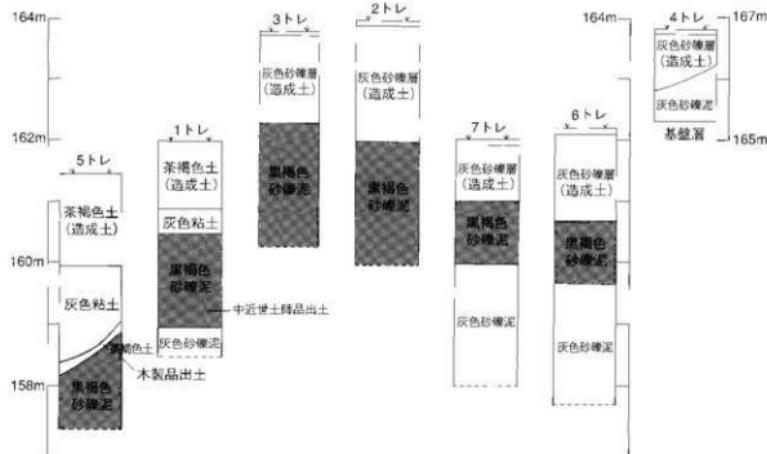
括弧番号	遺物写真番号	図版	地区	出土位置	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	内面の調整		外面の調整		形態・文様の特徴	備考
											外：浅黃褐色 内：灰黃褐色	ナデ、山根部2条凹窓	ナデ、山根部2条凹窓	口縁部連「ハ」字状に開く		
14	1	II区 包含層	弥生	壺	-	-	-	-	-							
	2	II区 包含層	弥生	甕	-	-	-	-	-	外：にぶい黄褐色 内：灰黃褐色	ナデ	ナデ	口縁部連「ハ」字状に開く			
	3	II区 包含層	弥生	壺底部?	-	-	-	-	-	外：にぶい黄褐色 内：灰黃褐色	ナデ	ナデ	口縁部連「ハ」字状、体部「ハ」字に開く			
	4	II区 包含層	弥生	壺底部?	-	-	-	-	-	外：にぶい黄褐色 内：灰黃褐色	ナデ、指圧痕	底部指ナデ? 回転ナデ?	厚手の平底			

## 第4章 コフケ遺跡

### 第1節 調査の経過

コフケ遺跡は、北原本郷遺跡の南丘陵斜面に位置し、南側の谷から広がる小規模な扇状地と河岸段丘からなる遺跡で標高は161.4mから166mを測る。調査は、島根県埋蔵文化財調査センターによって行われた試掘調査に統いて、調査範囲に幅2m、長さ4mから6mのトレンチを6か所設定し、平成16年10月19日より、掘削を開始した。調査区を東西に横断する道路をはさんだ南東側は調査範囲の大部分を占める扇状地形となっている。この部分に4か所トレンチを設けて掘削を行ったが、排土中から流れ込みとみられる土器の小片がわずかに出土したのみで遺構は確認されなかった。

一方、島根県埋蔵文化財調査センターの調査で中・近世の土師器や木製品が出土した道路の北西側は、西側後方に急峻な崖面が迫る河岸段丘となっている。後方の山丘は人頭大から一抱えもある山石を多量に含むもので、2か所に設けたトレンチでは崩落した岩礫を確認している。ここでは造成土の下層から旧水田と見られる耕作土層や杭列を確認した。層位から近世以降のものと考えられたが念のため島根県埋蔵文化財調査センターと協議を行った。協議では、中・近世の遺物が確認されたこともあり、北西部には近世以前の遺跡が埋蔵されている可能性も残されていることからさらに詳細な調査が必要と判断され、10月26日から北西部の全面調査を行った。その結果、包含層から須恵器片や土師器片が数点出土したものの、遺構は確認されなかったため平成16年11月10日、完掘写真撮影を行って現場の発掘調査を終了した。



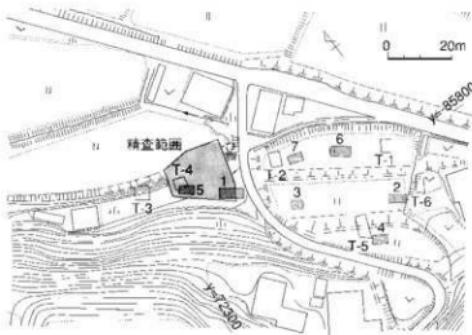
第16図 コフケ遺跡土層堆積柱状図（1/80）(島根県埋蔵文化財調査センター)

## 第2節 調査の概要

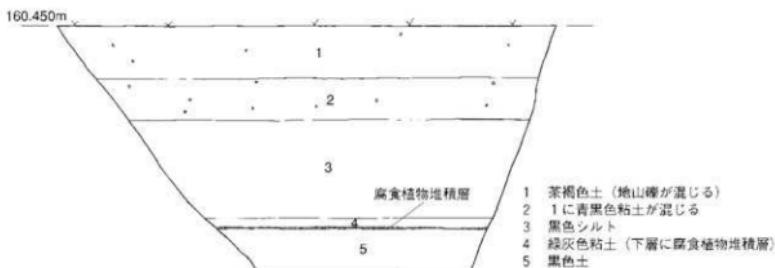
### 層序 (第17図)

遺跡面積の大部分を占める南東部は、かつて水田が耕作されており、圃場整備が行われたと見えて耕作土の下層は造成土となっていた。造成土の下層では黒色ないし青黒色土と灰色ないし暗灰色の砂土が交互に堆積していた。トレンチ1では少なくとも3層の砂層を確認した。砂層の厚さは斐伊川の上流にあたる南東寄りが薄く、下流にあたる北西寄りほど厚く堆積していた。このことから、南側の谷から幾度か土砂の流出が繰り返され、徐々に扇状地が形成されていったことが窺われる。

一方、北西部道路寄りのT 4トレンチでは埋土となっていた茶褐色土を除去すると厚さ40cmの青黒色のシルト層となり、木杭を検出した。これは旧水田の耕作土と考えられる。さらにこの下層には1cm前後の花崗岩礫が混じる黒色土が見られ、上層には腐食した植物の堆積層が認められた。この黒色土からは径が1~3cm程度の植物茎の遺存部を確認した。なお、T 4トレンチの西側に設けたT 3トレンチでは黒色土に代わって黒色シルトが1.25mほど堆積し、腐植質の土壤は認められたがていたが植物茎の痕跡はなかった。この2地点の土層状況から、かつて調査区の北西部は沼が広がっており、ちょうどT 3トレンチ辺りが菖蒲あるいは葦などが生息する沼の縁にあたっていた可能性が考えられる。



第17図 コフケ遺跡トレンチ配置図 (1/1500)  
(斜線は島根県調査トレンチ)



第18図 コフケ遺跡T 3トレンチ土層図 (1/60)

### 木杭列（第19図）

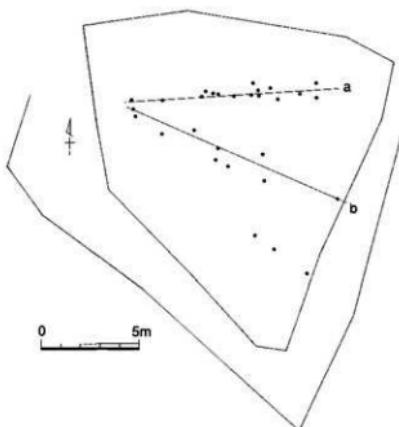
木杭のほとんどは径が10~13cm前後の丸木を割った割り木で、a列は水田の法面とほぼ平行していた。b列は、南東方向に杭列を延長すると概ね谷の方向に向かうように杭が打たれている。旧水田面に打たれていることから、この水田に伴う杭列と考えられる。

### 遺物（第21図）

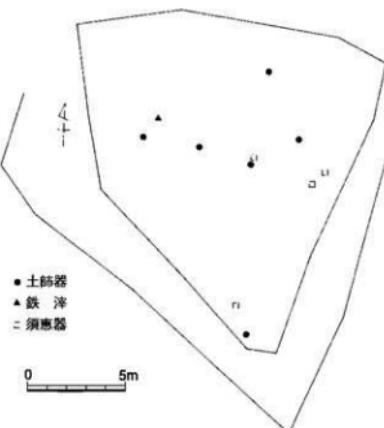
精査部の植物質を含む黒色土中から少數ながら土器片が出土した。土器は須恵器と中世土師器が主であった。

1、2はそれぞれ須恵器壺、身である。1は口径約14.0cmを測る。体部は逆「八」字状に開きながら立ち上がる。受け部は「八」字状に内傾する。調整は外面がケズリのちナデ、内面は回転ナデとなる。出雲編年5期と見られる。3は、浅鉢の口縁部である。口径は推計で39cmを測る。破片片側の口縁端部がわずかに外反しており、片口の鉢かと思われる。口縁端部は肥厚し、上面は平坦となる。4は、土師質の捏ね鉢あるいはすり鉢である。口径は推計40cmを測る。内面の一部に4~5条の卸し目が入る。外面調整はやや雑なナデで下部に横方向のハケ目が施される。口径が比較的大きめでもありこれらは在地で生産された可能性も残される。時期は12世紀代と推定される。

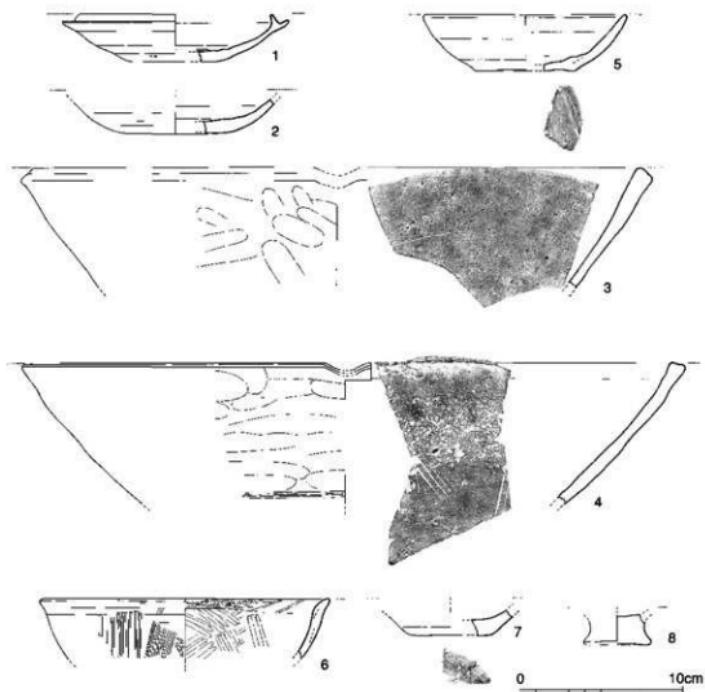
5は、土師器の壺である。体部は内湾気味に外方して立ち上がる。底面にヘラ起しの痕跡がわずかに認められる。3、4と同時期のものであろう。6は、硬質窓のある土師質の碗である。口径18cmを測る。体部は内湾して立ち上がり、口縁端部はさらに外方に屈曲させる。体部外面の調整はハケ目条痕を意図したものと思われ、縦方向に約1.8cm幅のハケ目が施される。口縁端部は横ナデとなる。内面は棒状工具によるミガキ、ナデとなる。概ね12世紀代と推定される。8は、柱状高台皿の底部である。底径4.2cmを測る。裾部はやや外方に広がる。時期は12世紀代と考えられる。



第19図 コフケ遺跡精査部木杭列位置図 (1/250)



第20図 コフケ遺跡精査部遺物出土分布図 (1/250)



第21図 コフケ遺跡出土遺物実測図（1/3）

### 第3節 小 結

コフケ遺跡では、遺跡有無の確認調査の段階で中世土師器や木製品が出土したことからさらに、詳細な調査を行ったところである。調査の結果、遺跡範囲の大部分は扇状地形となっていて、南側から地下水を伴った流入土が堆積することが判明した。

一方、北西側の一部では造成土下層から黒色シルト層や抽水植物の生息跡が確認され、中世かそれ以前ここが沿あるいは湿地の縁にあたる箇所と推定された。この箇所からはわずかな須恵器と中世土師器が出土した。このうち中世土師器は概ね12世紀代のものであり、調査地周辺に平安時代、生活の場があったことが窺われた。

中世初頭の尾原、北原地内に目を転じてみると尾原地内では上垣内たたら跡、北原地内では家ノ前鉄跡、横ヶ岸遺跡で野釣の操業が行われている。本遺跡と鉄操業との関連を窺うことはできないが中世初頭当時の人々の生活範囲の一端を抑えることができたといえる。何分にも検討材料に乏しい調査であったが本遺跡周辺では現在も尾原ダムに伴う埋蔵文化財調査が進められている。斐伊川流域の原始、古代の歴史解明もさることながら今後、斐伊川上流域における中世の歴史解明にも期待したい。

第6表 コフケ遺跡出土土器観察表

探査番号	遺物番号	写真図版	地区	出土位置	種類	器種	口径(cm)	器高(cm)	底径(cm)	色調	内面の調整	外面の調整	形態・文様の特徴	備考
20	1	括	黒色土下層	須恵器	坏身	14	-	-	外:灰黄色 内:暗灰黄色	内板ナデ、凹板ケズリ、ナ	体部進「ハ」字状に大きく開きながらちあがり、底部は斜め上方に延び、立ち上がりは「ハ」字状に内側する			
タ	2	括		須恵器	坏身	-	-	-	外:灰黃褐色 内:灰白色	内板ナデ、ケズリ		底部から、体部に「ハ」字状に開きながらある		
タ	3	括		須恵器 浅鉢		39	-	-	外:灰色 内:灰色	ハケ(な なめ)、ナ ナデ、指痕 「十」の 刻印	体部進「ハ」字状に大きく開きながらちあがり、片口沿部は肥厚し斜め平坦面を持つ			
タ	4	一括		土師器 こね抜 け付茶碗		40	-	-	外:灰黄色 内:灰白色	4~5条、ナ ナデ(指痕) の御印 上方 ハケ(ヨコ) 下	体部進「ハ」字状に大きく開きながらちあがり、底部は平坦面を持つ。平底部に凹線。	在地産		
タ	5	一括		土師器	坏	12.6	6.2	3.5	外:灰黃褐色 内:灰黃褐色	内板ナデ、内板ナデ、へら おこし	平底。底面と体部の境 明瞭。体部は内湾欠殊に立ち上がる。口縁付 近は「ハ」字状に開く			
タ	6	一括	黒色土下層	土師器	碗	18	-	-	外:灰黃褐色 内:褐黄色	口縁、体 部ヨコ、 内板ナメ ガキ	口縁、ヨコナデ 体部、ハク(タ ンナミテ)	体部は内湾気味に立ち上る。口縁は、外側に小さく折れる		
タ	7	括		坏	土師器	-	5.2	-	外:にぶい黄 橙色 内:にぶい黄 褐色	内板ナデ 底面、内板余切 り底	底面と体部の境兩面。 体部は、進「ハ」字状に開きながら立ち上がる			
タ	8	括		土師器	柱状 高台	-	-	4.2	外:にぶい黄 色 内:にぶい黄 色	風化 ナデ、風化	輪郭は、やや外に広がる。裏面はやや低い			

## 【参考文献】

- 「尾白Ⅰ遺跡・尾白Ⅱ遺跡・家ノ脇Ⅱ遺跡3区・川平Ⅰ遺跡 尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1」 岩手県教育委員会 2003
- 「平山遺跡第3調査区 萩伊川広域一般河川改修工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」 本次町教育委員会 2000
- 「墓地遺跡 尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ」 仁多町教育委員会 2004
- 「家の後Ⅰ遺跡・頃ノ内遺跡」 尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書2』 岩手県教育委員会 2003
- 「新修本次町誌」 新修本次町誌編纂委員会 2004
- 「般ヶ迫横穴墓群・西尾社遺跡・鬼ヶ谷遺跡・シベ石遺跡・時仏遺跡・時仏山横穴墓 尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」 仁多町教育委員会 2001
- 「ト布施横穴墓群・安久寺遺跡 尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財調査報告書4」 本次町教育委員会 2002
- 「家の上遺跡・右立遺跡」 尾原ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書1 本次町教育委員会 1998
- 角田徳幸「三瓶火山の噴出物と縄文時代遺跡」『島根考古学会誌 第20・21集合併号』抜刷 2004
- 「板屋Ⅱ遺跡(本郷) 志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書5」 岩手県教育委員会 1998
- 「下幌倉遺跡 道路改良工事に伴う第2次発掘調査報告」 仁多教育委員会 1990
- 「島根県教育庁 埋蔵文化財調査センター年報X」 岩手県教育委員会 2002
- 「島根県教育庁 埋蔵文化財調査センター年報11」 岩手県教育委員会 2003
- 「島根県教育庁 埋蔵文化財調査センター年報12」 岩手県教育委員会 2004



# 図 版

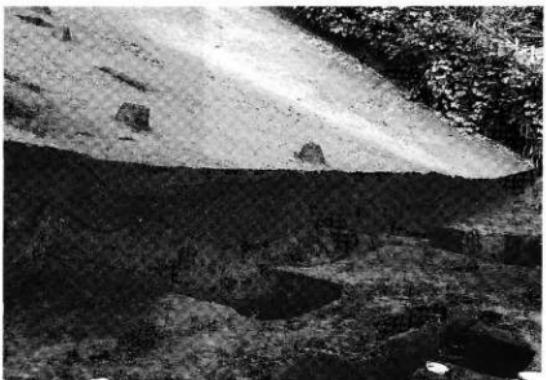




西ノ平遺跡(斜面上部)近景(東より)



西ノ平遺跡Ⅰ区調査前状況(南より)



Ⅰ区北半横断土層状況(東より)



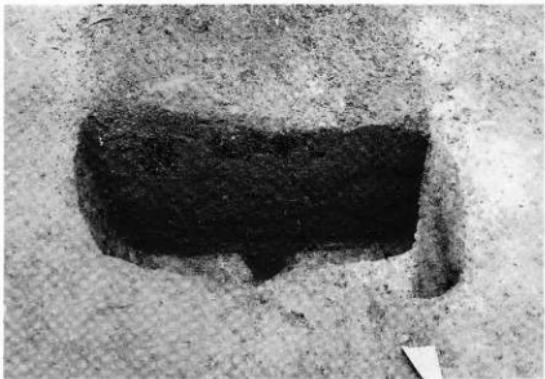
I区炭窯跡検出状況（北より）



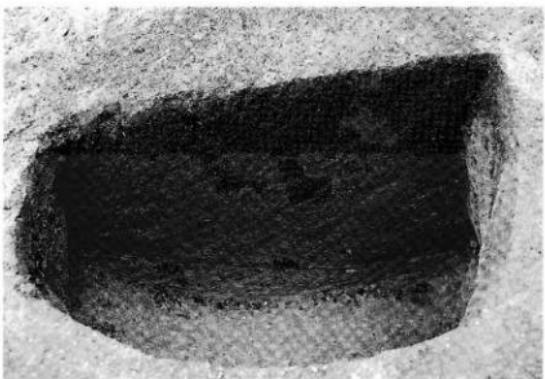
炭窯跡完掘状況（東より）



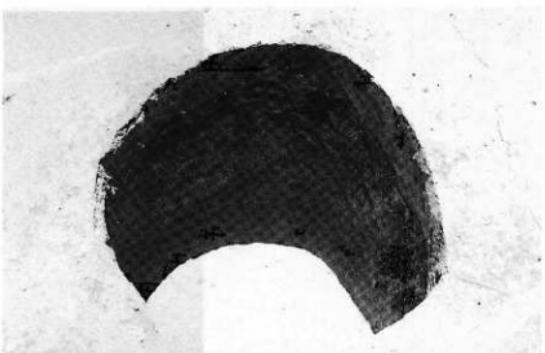
近世墓A群検出状況（西より）



I区ピット1半掘状況（南より）



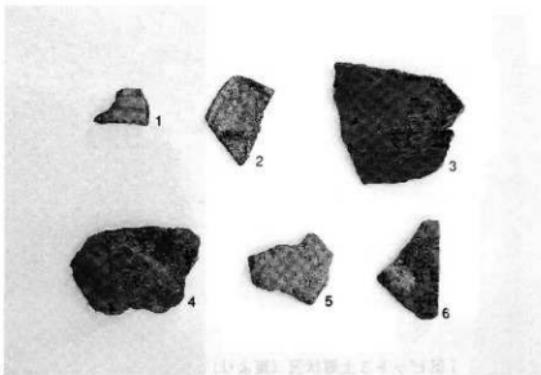
I区ピット3土層状況（東より）



ピット3完掘状況（東より）



I 区完掘状況（南より）



I 区出土土器



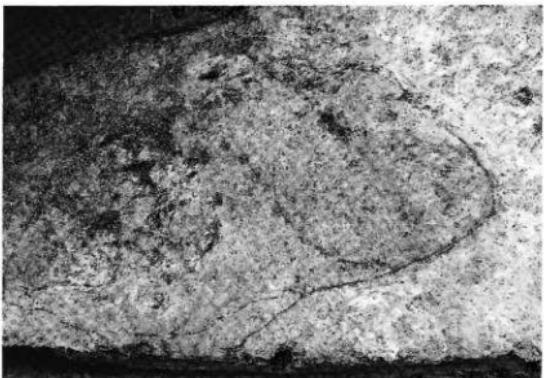
II 区縦断土層状況（北より）



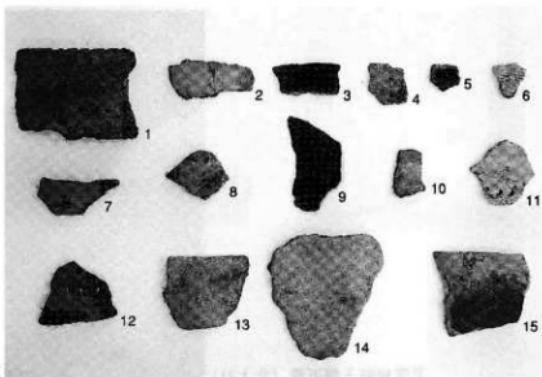
II区綾断土層近景（北より）



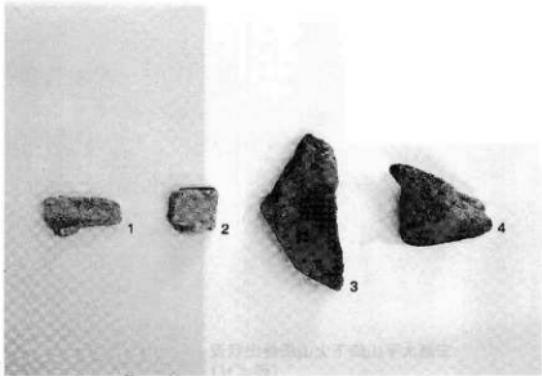
三瓶大平山降下火山灰検出状況  
(西より)



三瓶角井降下火山灰検出状況（西より）



II区出土繩文土器



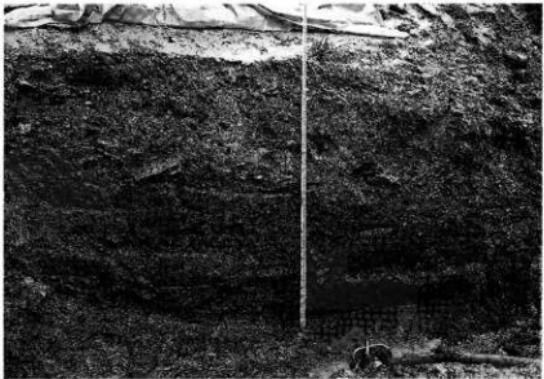
II区出土弥生土器



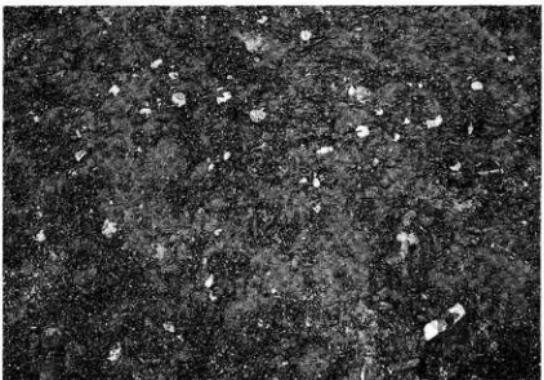
II区発掘状況（南より）



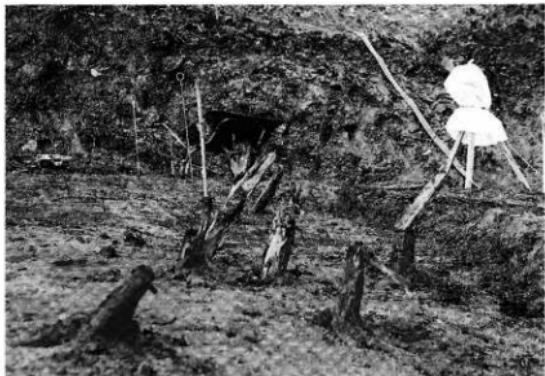
コフケ遺跡全景（南より）



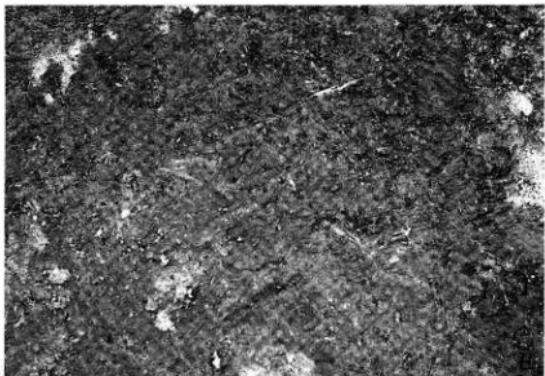
トレンチ3 土層状況（東より）



精査部抽水植物茎検出状況



精査部木杭検出状況（北より）



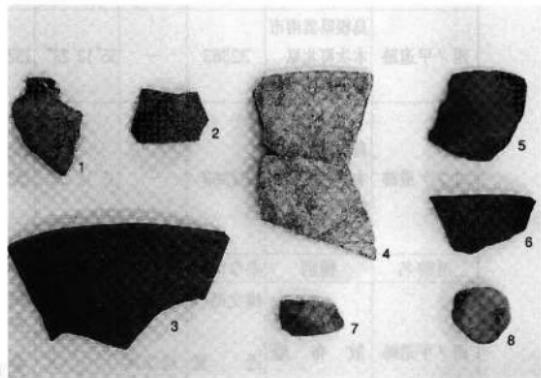
精査部植物質検出状況



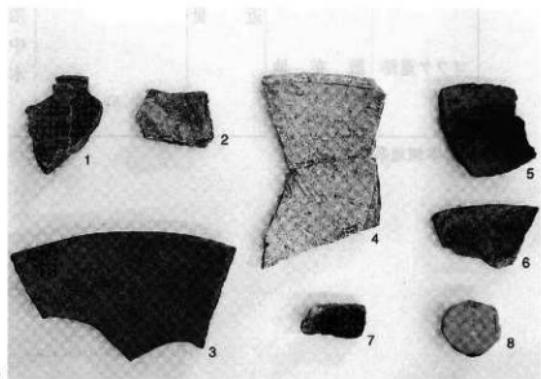
精査部土器出土状況



精査部全景（北より）



コフケ遺跡出土土器（外面）



コフケ遺跡出土土器（内面）

# 報告書抄録

フリガナ ニシノヒライセキ・コフケイセキ							
書名	西ノ平遺跡・コフケ遺跡						
副書名							
卷次							
シリーズ名	尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書						
シリーズ番号	6						
編著者名	坂本諭司・安川賢太・宇山川千歌子						
編集機関	雲南省教育委員会						
所在地	699-1392 島根県雲南省木次町1013-1 TEL 0854 (40) 1073						
発行年月日	2005年3月31日						
所取遺跡名	所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経 ※	調査期間	調査面積	調査原因
西ノ平遺跡	島根県雲南省 木次町北原 414外	32363	— 35°13'23"	132°57'33"	~	700m <sup>2</sup>	ダム建設
コフケ遺跡	島根県雲南省 木次町北原 249外	32363	— 35°13'20"	132°57'44"	~	3,000m <sup>2</sup>	ダム建設
~	~	~	~	~	~	m <sup>2</sup>	
遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
西ノ平遺跡	散布地	近世	縄文時代 落とし穴 炭窯跡 近世墓	繩文土器 弥生土器 墓石・錢貨・ 煙管	II区より二瓶 大平山降下火 山灰及び三瓶 角井降下火山 灰の分布面を 検出。		
コフケ遺跡	散布地	近世	木杭列	須恵器 中世土師器 木器			

※日本標準地図による

尾原ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

西ノ平遺跡  
コフケ遺跡

2005年3月

発行 国土交通省中国地方整備局  
雲南省教育委員会

印刷 松栄印刷有限会社  
松江市西川津町667-1